２０２３年８月２０日（聖霊降臨後第１２主日、特定１５、A年）
牧師メッセージ
「主イエス≠奇跡マシーン」
（マタイによる福音書15:21-28）

司祭ヨセフ太田信三

ティルスとシドンは地中海に面したフェニキアの町で、そこの住人はカナン人と呼ばれる異邦人でした。そのカナン人の女性が、主イエスに向かって「主よ、ダビデの子よ」と呼びかけました。けれども、主イエスは女性の必死の訴えに応えませんでした。応えなかった、というよりも、非常にショッキングな、厳しいほどまでの言葉で断りました。

主イエスは「奇跡マシーン」では決してありません。ご利益としての奇跡も起こしません。神のご計画に従って、主イエスは行動するからです。すべての人の救いを望む神は、ご計画により、弱く小さなイスラエルの民を選び、アブラハムと契約を結びました。取るに足らない弱き民族に救いが与えられ、そこに神の栄光が輝くなら、異邦人の誰もが神のすばらしさを知り、神の救いの世界へと導かれることになるからです。しかし、イスラエルは神から幾度も離れ、拠り所を見失い、さまよう「失われた羊」になってしまいました。しかしそれでも、すべての人を救う、という神の思いが失われることはありませんでした。神のご計画のために、いよいよ主イエスが遣わされるのです。主イエスは、神のご計画のために「失われた羊」のところへとご自分が遣われたことをよく分かっておられました。ご計画によれば、今はイスラエルに向けて救いが現される段階なのです。それゆえ、主イエスは神のご計画に沿わない奇跡を行うことはしません。「子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない」という強烈な言葉で、彼女の願いを拒否したのです。

しかし、このカナンの女性もまた、そのことをよく分かっていました。「主よ、ごもっともです。」と深く同意するのです。彼女は主イエスと同じように、神の救いの計画に従う信仰を持っていたのです。それゆえ彼女は、自らを当時のイスラエルでは非常に侮辱を込められた「小犬」であると認めつつ、「子供のパン」ではなく、「主人の食卓から落ちるパン屑」を願いました。それならば、今、異邦人に与えられても神の計画を損なうことにはならないからです。この機知に溢れた女性の信仰を、主イエスは「立派だ」と認め、彼女の娘は癒やされました。

主イエスは神の計画にどこまでも忠実です。自らの思いや、都合で奇跡を行うことはありません。その主イエスがカナンの女性の願いを聞きました。それは、彼女がただ奇跡を望んだのではなく、主イエスと同じように、神の計画に従う信仰を表したからです。わたしたちも、自らの信仰を顧みましょう。そしてあらためて、自らの都合ではなく、神の御心にこそ従って歩み始めましょう。そこに、すべての民を救う神の思いがあり、そこにこそ本当の幸いが実現します。